

Ladder

平成23年4月25日 第16号

北海道教育庁学校教育局

参事（生徒指導・学校安全）

中1ギャップ・高1クライシスを解消するために

Q 児童生徒にとって「心の居場所」となる学校づくりを進めるため、教師にはどのような対応が求められますか。

児童生徒が、自己理解を深め、安心して生活できる「心の居場所」としての学校づくりを進めるためには、本資料の第5号で紹介したように、あらゆる場面や機会を通して積極的に子どもに働きかける教育相談の考え方を生かした教育活動を充実させることが大切です。

その際、教師には、次のような教育相談で用いるカウンセリング技法を援用して、児童生徒に接する対応が求められます。

教育相談で用いるカウンセリング技法

つながる言葉かけ	いきなり本題から始めるのではなく、始めは相談に来た労をいたわったり、相談に来たことを歓迎する言葉かけ、心をほぐすような言葉かけを行います。 例：「部活の後、ご苦労さま」「待ってたよ」「緊張したかな」など
傾聴	丁寧かつ積極的に相手の話に耳を傾けます。よくうなずき、受け止めの言葉を発し、時にこちらから質問します。 例：「そう」「大変だったね」など
受容	反論したくなったり、批判したくなったりしても、そうした気持ちを脇において、児童生徒のそうならざるを得ない気持ちを押し量りながら聞きます。
繰り返し	児童生徒がかすかに言ったことでも、こちらが同じことを繰り返すと、自分の言葉が届いているという実感を得て児童生徒は自信をもって話すようになります。 例：児童生徒「もう少し強くなりたい」教師「うん、強くなりたい」
感情の伝え返し	不適応に陥る場合には、自分の感情をうまく表現できない場合が少なくありません。少しでも感情の表現が出てきたときには、同じ言葉を児童生徒に返し、感情表現を応援します。 例：児童生徒「一人で寂しかった」教師「寂しかった」
明確化	うまく表現できないものを言語化して心の整理を手伝います。 例：「君としては、こんなふうに思ってきたんだね」
質問	話を明確化する時、意味が定かでない時に確認する場合、より積極的に聞いているよということを伝える場合などに質問を行います。
自己解決を促す	本人の自己解決力を引き出します。 例：「君としては、これからどうしようと考えている？」 「今度、同じことが生じた時、どうしようと思う？」

※生徒指導提要（平成22年3月：文部科学省）から抜粋

生徒指導提要

文部科学省は、小学校段階から高等学校段階までの生徒指導の理論・考え方や実際の指導方法等について、時代の変化に即して網羅的にまとめ、生徒指導の実践に際し教員間や学校間で教職員の共通理解を図り、組織的・体系的な生徒指導の取組を進めることができるよう、生徒指導に関する学校・教職員向けの基本書として平成22年3月に「生徒指導提要」を取りまとめました。

特に、第5章では、「教育相談の意義」、「教育相談体制の構築」、「教育相談の進め方」、「スクールカウンセラー、専門機関等との連携」について記載がなされています。

「Ladder」は学校間の接続を図る「はしご」を意味しています。

